

---

# 季節高校生

GORO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

季節高校生

### 【Zマーク】

Z80761

### 【作者名】

GORO

### 【あらすじ】

季節が変わったとした春の終わり。

この時、ある事件が籠木たちの平穏な生活を一変する。

そして、籠木は……。



## 始まり（前書き）

お笑い系で書いて見ました。何かあれば感想をお願いします。

始まり

桜が咲く四月

とある学校で

俺とアイツとの学校生活が始まる。

第一話……始まり

四月二十日

四時間目が終わった休み時間。

「ゴンシ……

健全な黒髪の高校一年生、數笠 芥木（やぶかわ かいき）は突然頭に固い本を投げつけられた。

「やあやまやまやまやま……！」

そして遅れて腹を抱えて笑う女の声が聞こえてくる。數笠はやうやううとした動きで（固い本の直撃で効いていため）振り返る。

そこには同じ茶髪の高校一年生、かぎたに鍵谷

まき真木がたたずんでいた。

そしていつも通り…

「てめえ、いつもいつもふざけんじゃねーぞ…」

「別にふざけないよ、楽しんでるの」

「つ～～この馬鹿間抜けヤロー…！」

「勝手にいってなよ、馬鹿」

「黙れ馬鹿…！」

「あれ～、うるさい犬が吠えてる～」

「ボケ…！」

「ああ～うるさいな」ペッちゅぱい…！」

「ツ…！…何つたこのボケクソヤロー…！」

教室はバトルロイヤルとかした。

本や、鞄や、シャーペンや、様々な物が飛び交う。

そしてその光景を眺めている生徒たちの中の一人。黒髪の高校一年生、浜崎玲奈と同じく黒髪の高校一年生、島秋花は、

「また始まつたか……」

「こつもの事だよ、こつもの……」

はあへつと息を吐いた。

そして三十分後……

「はあ、はあ、はあ、はあ……」  
「うう……ぐぐう……」

結果、藪笠が数学の本を鍵谷の顔面に直撃させ勝利した。

しかしその勝利を獲得した直後、

ズドズドズドズドズドズドズドズド！！

物凄い響き渡る足音が教室へと近づいてきた。

そして、

鬼の形相の担任、亥下 いしま 剛が教室に突入してきた。

何故担任が突入してきたのかというと鍵谷は男子生徒から男教師に人気でありファンクラブまで作られていていたのだ。

そして亥下に続いて……

男子生徒プラス男教師の怒号が段々と近づいてきた。  
バカヤローデモ

數笠は舌打ちをしながら窓を開け（一階の窓）足をかけ、

數笠は、鍵谷に視線を向けると…

鍵谷は涙を目に浮かべながらニヤリと笑っていた。

藪笠は叫びながら窓から飛び降りた。

そしてその後、

ଏହା କଥା କଥା କଥା କଥା କଥା କଥା କଥା କଥା କଥା

叫び声が響き渡った。



## 始まり（後書き）

どうでした？面白かったですか？

あまりお笑い系は書かないのですがアドバイスできたら教えてください。

笑み（前書き）

続きを書いて見ました。

## 笑み

第一話……笑み

四月一十一日

一時間目の休み時間

藪笠は机にへばりつく形で倒れていた。

体のあちこちには包帯やら絆創膏が見られる。

言つまでもないが昨日の逃走の際、死にはしなかったもののそれなりの怪我をしたのだ。

しかし以外に体が頑丈な藪笠はそんな事を思い出しながらギラリとある女子を睨む。

鍵谷 真木だ。

話に聞くと男子生徒プラス男教師バカヤローどもが居なくなつた時、転げ回るぐら  
い笑つていたらしい。

數笠は思い出しだけでもイライラと眉間にシワをよせるが、  
だからといって、やり返してやるつとこいつは起らなかつた。と  
いうか体がダルかつた。

數笠は深く息を吐き窓から見える外を眺める。

すると數笠に一人の女子が近づいてきた。

「ホント飽きないよね、あんたたち」

女子の名前は浜崎 玲奈。鍵谷の幼馴染みであり学年トップだ。

「俺だつてホントはやりたくないんだけどな……」

しかし体がダルダルな藪笠は浜崎にそりゃうと再び息を吐いた。

そして、ふうん……と声を濱崎にチラリと視線を向けながら藪笠は思った。

学年トップと下から三十番目の俺では一緒に話していくこと事態おかしいのではと、

しかし浜崎にとつてはどうでもいい事なのだろう。

浜崎はそんな藪笠を見て小さく笑い、でも……つと続けながら何かを言おうとした。

藪笠は、うん？とその続きを耳を傾けた。

そして浜崎が次の言葉を言おうと唇を動かした、

その時、

ゴンー！

またしても固い固い本が藪笠に直撃した。しかも顔面に……

浜崎は突然の事にキヨトーンとし、それにつけて変わって、藪笠は……

すう……と立ち上がり、田をつぶりながら不適に笑うと……

椅子を蹴飛ばし、全速力で鍵谷に突進して行つた。

そして一人だけ残された浜崎は、

いつものバトルロイヤルを見て、はあゝ…………つと息を吐いた。  
しかし浜崎は口元を笑みに変えると、

「（でも……あんたは鍵谷とそういう時の方が楽しそうに見えるんだけどね……）」

次の授業が始まるまで、數笠と鍵谷を楽しそうに眺めていた。

そしてその後、現国の女教師にゲンコツを貰い、藪笠と鍵谷が廊下に立たされたらしい……

笑み（後書き）

できたら感想をください。

第三話……美術

第三話

四月二十一日

二時間目、美術

藪笠のクラスは只今美術の風景作画を行つてゐる。

皆が作画に集中し、少しの話声があるも、集中できないとまでいかないそんな中…

たつた二人の男女が硬直していた。

「…………」

藪笠と鍵谷だ。

そして一人の視線の先には板がある、表面にも絵の具で何かが描かれている。

しかし、

そこに描かれている物は、全く風景とは呼べる代物ではなく…

藪笠のは川を描いたつもりなのだろうがそこに描かれているものは、赤と黒が支配した地獄絵図。

そして鍵谷のは全く風景とはかけはなれ何を描いているのかさえわからぬいぐらい桃色で染められていた。

藪笠と鍵谷は深刻な表情で、

「……………なあ？」  
「何？」

「「これでいいやるへ..」

「.....どうするつて...」

「俺は最善の策をやつた結果が「これだ」

「.....」

藪笠と鍵谷は同時に息を吐いた。

そして刻一刻と時間が休み時間へと近づいていく。

このままでは、一人そろつて居残りだ。しかも美術の教師は美術の先生ですか?と尋ねたいぐらいのフランケンショタイン教師。さらにはネチネチとした性格。

藪笠はガックリと肩を落とした。  
続いて鍵谷もガックリと肩を落とした。

そうして後残り五分となり。

藪笠はガタツと立ち上がると板を持ち上げ、鍵谷も同じように立ち上り板を持ち上げた。

そして二人は居残りを覚悟にフランケン教師に描いた板を提出しようとしたその時、

ズルツ

「え！？」  
「なー？」

「ドォン！！」

床に付いていた桃色の絵の具に鍵谷が足を滑らせ、藪笠立を巻き込みながらこきよいよく倒れた。

「こつたたたた……お前、いきな……り……」  
「『』、ごめ……」

そして一人は目を開けお互にどうしを見ると、一人はそろつて硬直してしまった。

何故なら、お互いの顔が後数センチだったからだ。

「…………」

藪笠と鍵谷は顔が真っ赤に染まる。

するとそんな光景に呆れたのか、フランケン教師がズンズンと進んできた。

藪笠と鍵谷は、はつ、としながら直ぐ様離れ、同時に板を渡した。

放課後、帰り道

藪笠と鍵谷は茫然とした状態でかえつていた。

あの後フランケン教師に板を渡すと突然、号泣しだした。

どうやらあの時、倒れた拍子に板と板が重なり合って、色の重なりにより風景へと変わつたらしい。

そして、その風景がとても美しかったのかフランケン教師は号泣したのだそうだ。

そして、藪笠と鍵谷は結果的に助かったには助かったのだが、

「この『氣まづい霧因氣』だけは未だにはれなかつた。

## 銅育小屋（前書き）

久しぶりに書いてみました。でも、ダメ文があるかも……

第四話……飼育小屋

四月二十六日

昼休み

「飼育小屋？」

昼飯を食べ終え、机に座りのんびりとしていた數笠芥木は、顔を横に向け、そう一聲を上げた。

そして、

「うん。飼育小屋。一緒についてきて」

數笠の隣では、ニコッと笑顔を向ける、鍵谷真木が、唐突に頼んできた。

「イヤ」

だが、數笠は断固拒否とした顔をする。

しかし、

「いいじゃん、暇なんだからー。」

「イヤ」

「飼育小屋だよ。可愛いウサギとかウサギとかウサギとかいるんだよー！」

「イヤ」

「カワいいよーーあのクリー、とした田とか、あのプリティーな顔とか」

「イヤ」

鍵谷は諦めずに藪笠にアタックする。

だが藪笠は、それを絶対拒否といつ壁で跳ね返し、全く鍵谷の言葉を聞こえようとしない。

鍵谷は頬を膨らませ、田に涙を浮かべる。

しかし、藪笠は全く慌てる素振りを見せない。

すると、その時。

鍵谷はあることを閃いた。

「ねえ、藪笠？」

「あん？」

「先生に、この前藪笠が私に痴漢しようとしたって言つたやつっていい？」

中庭

藪笠と鍵谷は今、二人並んで飼育小屋へと向かっていた。

あの後、藪笠は、鍵谷の脅しに抵抗できなかつた。この女なら、間違いなく断つた直後、言つに違ひない、と思つたからだ。

藪笠は深く息を吐く。

「で？ 今回は何で飼育小屋なんかに用があるんだ？ お前、今まで飼育小屋なんて行かなかつたじゃねえか」

「いや、何か、新しいウサギが飼育小屋に入れられたらしいの」

「新しいウサギ？ それって普通のウサギだろ」

「いやいや。私の勘だと、そのウサギちゃんは、絶対プリティーで

愛らしいウサギちゃんなんだよ」

「…………」

テーシヨンMAXの鍵谷に、藪笠は、呆れた眼差しを送りつつ、こんなアホな女のために俺の昼休みは取られたのか…、と肩を落とした。

飼育小屋

藪笠は鍵谷に尋ねる。

「なあ、鍵谷」

「何？」

「お前わつ毛、絶対プロテイーとか言つてたよな？」

「うん」

「後、變ひじこウサギちゃんとか言つてたよな？」

「うん」

數笠は息を吐き、顔を笑顔にして、

そして、

「じゃあ、聞くナビ。……あれ、ウサギじょなによな？」

飼育小屋の中にてウサギに指をやした。

そのウサギは白い毛で、頬に一筋の傷があり、爪は普通のウサギより断然長く、顔が、めっちゃ怖い…。

「何言つてんの？あれはビックリ見てもウサギじょや」

「ビックリ見てもウサギじょねエエエエエ…」

數笠はめつめつ怖いウサギを力一杯指さす。

「何だよあのウサギ…普通にモンスターハ○ターとか出てきやうだぞ…」

「そつかなあ？可愛」と思つナビ

「可愛くねえ…むしろ恐ろしこわ…」

鍵谷は、うーん、でも可愛いのになあ……と言いながら、飼育小屋の扉に鍵を差し込む。

あれ……差し込む？

「ちよつと待て……！」

「何？」

「お前、正氣か！？絶対ヤバイって！……ってか何で鍵持つてんだよ

！？」

「飼育係に貰つてきちゃつた」

「いや、貰つてきちゃつたって

藪笠はあまりの事に、愕然とする。

だが、

「それ……」

次の鍵谷の言葉に藪笠は、

「中入るのは私じゃなくてあんたよ」

地獄を見ることになる。

飼育小屋 室内

「何、この状況?」

數笠は飼育小屋のウサギがいる室内の中心に立っている。

そして、數笠の視線の先には、めっちゃ怖いウサギが立っている  
んでいた。

まるで、オイ……なに我の敷地またいどんねん……と言っている  
ようだった。

「あの……鍵谷さん?」

數笠は後ろに振り返り、とっとと避難した鍵谷に声をかける。

「どうしたの?」

「俺、出たいんですけど」

「ええ、つまんない」

「いや、つまんないとかじやなくて……」

「まほら、頑張ってね

」

鍵谷の無責任すぎる言葉に、數笠は、いや、頑張ってねじやねえよ……てか帰る……俺、帰るからな……。と叫び、扉へと歩いて行った。

だが、

「數笠、後ろ……！」

「後ろっ！」

數笠がそう言われ、後ろに振り返った時。

ドゴッ……

そしてその時、數笠は見た。

數笠は鼻に物凄い衝撃が襲った。

めつちや怖いウサギが今しがた、ドロップキックの体勢をしている様を…。

数時間後

「うう……」

數笠は鍵谷に運ばれ、保健室のベッドで寝込んでいた。顔には絆創膏があちこち貼られている。

そして、寝込んでいる數笠の傍らでは、ちょうど用事で保健室にいた、浜崎玲奈と島秋花、さらに今回の元凶である鍵谷真木が椅子に座っていた。

「全く……、ちょっとせつ過ぎじゃないの? 真木」

「いや、今回は私、何もやってないよー?」

浜崎は鍵谷にそう問い合わせるが鍵谷はそつと掌を振る。

浜崎は鍵谷の様子から、嘘はついてないとみて、寝ながら軽くうなされている藪笠に視線を向け、息を吐いた。

すると、島秋が鍵谷に尋ねた。

「じゃあ、藪笠君は誰にやられたの？」

「えー？…………いや～…………それは…………」

「…………」

### 再び飼育小屋

浜崎に再び問い合わせられた鍵谷は、今、浜崎と島秋を連れて再び飼育小屋に訪れた。

「何、あのウサギ……」

浜崎は愕然とした。

そして、確かにあのウサギなら、真木の話は本当だと、思えた。

すると、浜崎は隣で体を震わせている島秋に気がついた。

「どうしたの？花

「ああ、あ、あれ……」

「ああ、あ……怖こよね。やつぱ」

「可愛い！！」

1

「あの顔……………プリティー」

浜崎は再び、愕然とした。

しかし、その時。浜崎は鍵谷がいないことに気がついた。

そして辺りを見渡した、その時。

「一飯だよ」

浜崎の耳に鍵谷の声が聞こえてきた。

浜崎は直ぐ様その声が聞こえた方向に視線を向けると、そこには…。  
ウサギ小屋に入った鍵谷が、例のめっちゃ怖いウサギに、ウサギ用の餌を、すり潰し、固め団子状にした物をあげていた。

「ちょっと！！！真木！！！危ないわよ！」

浜崎は鍵谷にそこを離れると云つたが、鍵谷は一向に離れようとはせず、しまいにはひからに向かってピースをしだした。

だが、その時。

ドサッ

先ほどまで餌を食べていためっちゃ怖いウサギが突然倒れ出した。

浜崎と島秋は、どうしたのかと、よく、めっちゃ怖いウサギの顔を見ると、

めっちゃ怖いウサギはめっちゃ苦しそうにしているウサギに向かって変貌していた。

浜崎と島秋は、同時に、え！？と、驚いた声を出した。

すると、めっちゃ苦しそうにしているウサギの前に鍵谷はしゃがみ込んだ。

そして、

「今の餌に下剤入れたから、当分苦しいよ」

物凄い問題発言をし始めた。

「私の言つて聞いてくれたら、私特製のお薬あげるナビ、ビツカ  
ル。」

（こや、ビツカして、あんた鬼！？）

（真木……そのウサギをビツカるの……）

浜崎と鳴秋は鍵谷に少し恐怖を感じた。

めつひや怖いウサギからめつひや苦じてこるウサギに変わったウ  
サギは、少し戸惑つたが、お腹の苦痛に耐えきれず……

ついに、わかつた。…あなたの言つてることは、とこつひとつ表情を  
見せた。

その後、めっちゃ怖いウサギは飼育小屋から脱走しどこかへ消えて  
いった。らしい…

第五話……競争

四月三十日

三時間目

絶好の天気に見舞われたその日。藪笠のクラスは体育の授業中であった。

そして、

「今から長距離走るぞ」

体格の良い男性教師、留沢友秋（るいざわ、ともあき）はそう一始めに言った。

この学校では、長距離走や短距離走などの時だけは、男女一緒に走るという変わった規則があり、そのため藪笠のクラスはこの時間、男女一緒に走ることとなつたのだ。

周りの男子や女子などが、かくじ準備体操をする中、

「頑張ろ、真木」

島秋は、ストレッチをする鍵谷に話しかける。

だが、

「…………」

鍵谷はただ黙々とストレッチをし、全く反応せず。

「真木ちゃん？」

島秋は首をかしげ、鍵谷の肩を揺さぶつつかとまで思った。

すると、その時。

「あー、ほっときなさい、花」

後ろから、腰に手をついた浜崎が呼び止めた。

島秋は、何で？と振り返り浜崎に尋ねると、浜崎は、自分の後ろに指をさした。

島秋はその先に視線を向けると、

「藪笠君？」

そこには、藪笠が立っていた。

だが、そんな藪笠の顔はどこか真剣な表情をしている。

「何か、何週するかで勝つたら今口の面飯を奢るみたいよ」

浜崎は呆れように息を吐き、はは…、と島秋は苦笑いをした。

すると、その時。

ピィィィー！！

集合の笛の音が耳に入った。

集合となっていた場所は、運動場のはしつこに生えた大樹の下だつた。

一周は、ほぼ、一キロといった所だ。

そして、そういうふうに生徒たちは大樹に集合し、

「について」

數笠と鍵谷の、飯代をかけた。

卷之二

レースが…。

始まつた。

その瞬間、藪笠と鍵谷は全速力で走り去つていった。周りは啞然とし、段々と離れていく一人に留沢は、

「あいつら……短距離走と勘違にしてるんじゃないだらうな」

走るルートは運動場から校舎の裏を周り、そのまま運動場に戻るといつたもので、藪笠と鍵谷はちょうど校舎の裏手を爆走していた。

「言つとくけど、負けたら昼飯奢れよーー！」

「あんたこそ、負けたら奢りなさいよーー！一杯奢らせてやるから」

だが、

十五分後

「「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」」

「あんたら馬鹿でしょ」

全速力で六キロも走つていればそうなるだろ?。

浜崎は呆れた眼差しをペースダウンした一人に向けた。

「藪笠君!…真木ちゃん!…ファイト!…!」

島秋は応援してくれたが、何故かその気遣いが痛い…。

「お、おう…」

「あ、ありがと…」

そして、藪笠と鍵谷は苦笑いしながら走り去つていいく浜崎と島秋をただただ見ていることしかできなかつた。

この長距離走は五キロ走りきつたら、本人の自由で止めることが出来るもので大体の生徒は五キロで止めるのだが…。

藪笠と鍵谷は、勝負もありもつ一キロ走ることを選択してしまった。

そして、最後を走っていた浜崎と島秋はこれで最後だつたため、結局。

もう藪笠と鍵谷しか残つていなかつたのだ。

すると、そんな時。

「ツー？」

鍵谷は表情を歪ませた。

「どうした？」

「別に…………何もないわよ」

藪笠は振り返り、声をかけるが、鍵谷はいつも通り喧嘩を売るようないきよいで、ふいっ、と顔を振り、

「…………… そつかよ」

藪笠はそんな鍵谷にそつとスピードを上げ、田の前の角を曲がり鍵谷の田の前からいなくなり…。

その場に静寂が漂つ」ととなつた。

「……………」

鍵谷は走るのを止め左足の足首を見てみると、足首は、内出血をしたらしい青アザになつていた。

馬鹿だなあ、と呟く鍵谷。

だが、誰もその言葉を聞いてくれる人はいない。

鍵谷は深く息を吐いた。そして一人寂しく、左足を引きずりながら田の前の角を曲がつた。

その時。

「ぱーか

曲がった先に、走つていったはずの藪笠が立つっていた。

へ?と驚いた表情を見せる鍵谷。

だが、藪笠はそんな鍵谷に背を向け軽くしゃがみ、

「ほり。足ひねつてんだろ」

な、な……、と鍵谷ははつらたえ反論しようとしたが、いつまでも背を向ける藪笠に負け、素直に藪笠の背中に乗つた。

「ツ、重い……」

「ブツー?」、いわゆれこーーー」

先生や生徒たちがいる大樹についた頃には、既にチャイムが鳴り終わっていた。

「どうしたんだ、鍵谷！」

留沢は鍵谷を背負つた藪笠に駆け寄ってきた。その後ろには浜崎と島秋の姿がある。

「あ、こいつ足ひねつたみたいで」

「……」

藪笠は鍵谷の状態を留沢に説明し留沢に鍵谷を任そうとしたが、

島秋が、私が保健室に連れて行くから、と言ひ出し留沢はやれやれと息を吐き、島秋に鍵谷を任せることにした。

鍵谷は保健室に向かう鍵谷の背中を見て、安堵の息を吐いた。

若干、顔が赤かった鍵谷が気にはなつたが…

だが、その時。

「藪笠」

浜崎が一いつ瞬間に向かつて歩いて来た。何故か一コ一コとした顔で、

「な、何だよ、浜崎」

藪笠はそんな浜崎に顔を青ざめる。

「イヤーね、ちょっと」

あると、浜崎は藪笠の皿の前でしゃがみこみ…。

そして、

ガシッ！

「ツ――――――――――――」

その瞬間。

藪笠は全身を震わせた。

浜崎が掴んだのは、鍵谷と同じ左足の足首だ。手を離すと、鍵谷に負けないぐらいいの青アザができていた。

「やつぱり。はあ――……、ほら、あんたも行くわよ

そして、浜崎は藪笠に手を差し出しあつが……。

藪笠は……、

「ツ……おま、……な……」

涙田で自分の足首を押さえていた。

昼休み。

食堂。

一年から三年まで、多くの生徒が集まり、良い匂いがじゅう中から漂う中、

「「で?」」

「「うん?」」

白い椅子に腰かけて、足首に包帯を巻いている數笠と鍵谷は、向かい座る浜崎を睨んでいた。

「何でお前の飯代をおごらないといけねえんだよ……」

「わうだよーー玲奈ーー。」

浜崎にくるようこと言われ来てみれば、今日の飯代を奢れ、と言わ  
れ、今抗議の真っ最中なのだ。

だが、学年トップの浜崎にかかれば、

「私、あんたらのせいで、四時間遅刻したんだけど

「「……」「」」

數笠や鍵谷など、敵ではなかつた。

ずーん、と落ち込む數笠と鍵谷。

すると、

「玲奈ちゃん」

食堂の開いたドアから、島秋が走ってきた。

「島秋？」

そして數笠は首をかしげ、鍵谷と同じよつこ、何故、島秋がと思つた時。

「ねえ、玲奈ちゃん。『J飯奢つてくれるるつてホント？』

一人は島秋の発した言葉に硬直した。

...「...」飯、奢ってくれる?

あれ、確か俺たちが浜崎の飯代奢らないといけないんじゃ、

どうい事?

「えー、……浜崎さん？まさかと思いますが、まれかじやないですかね」

「ううだよな……玲奈。そんな意地悪なんかしないよね……」

うろたえるのも無理もない。何故ならこの島秋は、あまりの大食いで、噂によると放課後に残つた二十品ほどの食堂の料理を一人でたいらげたらしいのだ。

そんな彼女の分まで払つとなると、間違いなく一人の財布は終わる。

藪笠と鍵谷は浜崎に、勘弁を！…、という顔と眼差しを送つた。

だが、

浜崎は…。

「ホント」

二ツコリとした笑顔を、藪笠と鍵谷に送り返した。

その後…。

食堂の料理が全てたいらげられた、といった噂が、再び学校中広まる」となる。

## パート? (前書き)

よかつた感想お願いします。

## デート？

第六話……デート？

五月二日

朝

土曜日で学校が休みの早朝。  
七時三十分

「うーん……」

島秋花は一人、立っていた。

今、彼女がいるのは学校から少し離れた公園の一角。  
辺りには犬の散歩をする人や、ランニングをしている男性がちやほ  
や見える。

だが、彼女は別に公園に遊びに来たわけではない。  
ただ待ち合わせがこの公園になつたのだ。  
そして、彼女が待つてるのは、

「島秋ー」

遠くから片手を振つて歩いてくる少年、藪笠芥木だ。

「あ、藪笠君」

島秋は手を振つて、藪笠に駆け寄る。

「おはよつ  
「お、おひつ」

すると、藪笠は言ひよどみながら返事をした。  
どうしたの?と島秋は首を傾げる一方、藪笠は、

(し、島秋だよな……)

動搖していた。

理由は物凄く単純。

可愛かつた。

ピンクの花柄が付いたオレンジ色の長袖に青いスカートの彼女。  
普段は子供っぽく見えていたが、私服になると、一変してとても綺麗に見えた。

「で、どこに行くんだ?」

だが、藪笠は顔を反らし彼女を見ないようにする。  
顔が赤くなっていることを知られたくないからだ。

しかし、

ギュッ、

「…?」

次の瞬間。

數笠の顔をさらに真っ赤に染まった。

彼女の手が數笠の手を握ったのだ。

數笠はあたふたとしながら視線を彼女に向けると、

「内緒」

二ヶコリと笑みを見せる島秋の顔があつた。

力一、と顔が熱を持った。  
そして、數笠は何故このような状況になつたのかと、昨日の事を思い出す。

五月一日

放課後

担任のホームルームが終わり、急ぐ用事があると教室から鍵谷と浜崎が居なくなつた時、

「明日『デート』してくれない？」

突如、近づいてきた島秋の一言から始まった。

「……島秋」

「何?」

「熱でもあるのか?」

「ないよ」

「そうか」

ガラガラ（ドアを開けた音）

「俺、ちょっと保健室行ってくる。幻聴が聞こえたみたいだから多分ゲームで夜更かししたからだろ?。そうだ。そつに違いない、と思い込む藪笠。

だが、

「藪笠君」

島秋はニッコリと笑みを作りながら一言で、

「幻聴じゃないよ」

殺気が藪笠に降り注いだ。

「……………」  
「うおつー?」

カッターナイフ、シャーペン、ハサミ、物差しが藪笠目掛けて放たれる。

しかし、とつせに殺氣に気づいた藪笠なんとかその凶器たちから避けだすにズドズドズドと凶器が刺さり、

「あ、あぶねえだらうがー? 当たつたらどうすんだコト? ...」  
「ちつ。はずしたか」

今、畠打ちしたやつぶつ飛ばす、と額に浮かび上がった青筋かみをピクピクさせる藪笠。

「藪笠.....テメエ、鍵谷、浜崎に続いて島秋花まで  
「に続いてつて何だよーーつて言つたかを畠打ちしたやつぶつ飛ばすーー」

乱闘の末、藪笠は島秋と二人。

データーはめとなつたのであつた。

「で、どこ行くわけ?」

藪笠は島秋に連れられるがままに今、公園から直ぐ側にある商店街に来ている。

そして、時間も時間、曜日も曜日なわけで人通りが多く、藪笠は周りを気にしながら歩いていた。

内心でカップルに見られないかとドキドキする藪笠。

だが、

「あー、藪笠君、あそ」……

そんな考えをぶち壊すのが少女、島秋花なのだ。

「……なあ

「何?」

藪笠の目の前には一軒の飲食店が建っている。

そして、その店の直ぐ側にある白い木の看板があり、そこには、

「『男女カップルでの早食いチャレンジ』って……もしかして……

……これのために俺を呼び出したわけ?」

「うん」

ぐるりと後ろに体を向け、  
藪笠は、

「  
帰る」

トドケられてしまうのだが、

「ダメ」

ガシツと女とは思えない程に腕を握られ、

「痛い！？ どんだけ怪力な

「早川」大正二年九月

「アーティスト」

「無視！？無視なんですか島秋さんつぎやああああああああ！！腕がもげ

תְּהִלָּה!

ズルズルと藪笠は島秋に連れられていつたのだった。

時刻は昼の一時。

「はあ……」

藪笠は今、ベンチでダウンしていた。

あの店に入つて数分で島秋がビッグサイズの料理を完食したのまではよかつたのだが、その後が大変だった。

島秋のあまりの早食いに、その店の店長が対抗心を見せ、数十倍の料理をチャレンジするはめとなつたのだ。

そして、関係のない藪笠にも被害が及び……。

「苦しい……」

こつこつして藪笠はダウンしていたのだった。

すると、その時。

「はい、バニラ」

苦しいって言つてる人に渡しますか、と島秋が直ぐ近くにあつたアイスクリーム屋さんから自分と藪笠の分のバニラ、チョコのアイスクリームを買つて渡してきた。

だが、渋い顔をしながらアイスクリームを受けとる藪笠。どうにも断わるに断われなかつた。

「はあー」

數笠は息を吐きながらバーーーと舌でペロッと舐める。

そして。

まあ少しづつ舐めてたらなくなるだろー、トライスクームから舌を離し空を見上げた。

その時だった。

横から、ペロッ、と今さつき數笠が舐めていた所に別の舌が触れた。

「ー?」

舌が来た所に視線を向けると、ヤレーニは、

「いただき」

ニッコリと笑みを浮かべる島秋の顔が、

「お前ツーなツー?」

顔を真っ赤に染ませ島秋から距離を取る數笠。

そして、今のは何かの見間違い、見間違い、見間違いだあーーーと

頭で不定しょりとした。

その後。

「へえー、いい雰囲気ねえ」

「え？」

その声に藪笠の表情が固まった。

どこかで、いや、週に何回も聞いたことがあるような…。

藪笠はゆっくりと視線をその声が聞こえてきた方向に向けると、そこには普段からでは考えられないような服装をした少女と何故か驚いた表情を見せる少女が立っていた。

藪笠はひきつった顔で口を動かす。

「は…浜崎…」

「あー玲奈ちゃんに真木ちゃん」

藪笠と島秋のデートはまだ始まつたばかりだ。

トート?2 (前書き)

感想お願いします！

## デート?2

### 第七話 デート?2

時刻は昼の一時。

「はーあ……」

藪笠 芥木は頬をつきながら溜め息を吐いていた。

今、藪笠がいるのは商店街に並ぶ一件の「コーヒー・カフエ。室内には男女の客が賑やかに喋りながらくつろいでいる。

だが、藪笠自身は全くくつろげないでいた。

……何故なら、

「花、まさかアンタが藪笠ねらいだつたなんてねえー」

「ちがうよー。ただ藪笠君にちょっと臨時の恋人役になつてもうつてたの」

「へー……、臨時の恋人役にねえー……」

浜崎 玲奈、島秋 花、そして鍵谷 真木の三人が自分を置いて勝手に話しまくつていいからだ。

さらに、何故か鍵谷からは殺氣のような視線を感じる。

ズズッと気まづさを感じる藪笠。

しかし、この場を離れたい藪笠はゴクリと唾を呑み込み、

「……………あー、お前ら」

「「「何?」「」」

「うう……………」

まさかの三人返事に怯みそうになつた。  
だが、

「いや、俺ちょっと向こうに行つてコーヒー入れてくるわ」

そう言って藪笠は脱兎のごとく彼女たちから死角となるコーヒー入れ場へと逃げる事ができた。

五分後。

「はーあ……………」

藪笠は未だコーヒー入れ場に突つ立つっていた。

手にはコーヒーが入ったカップが握られている。

（はあー、早く帰りてえ……）

ビーフも戻りにいい藪笠は再び溜め息を吐く。

そして、コソッと未だ喋り続いているだらう彼女たちの様子を伺つ。

浜崎と島秋が未だにトーク中だった。

何かい吐くのかと溜め息を吐く藪笠。

しかし、その時。

ん?.....浜崎と島秋が未だ?.....あれ?

誰か一人忘れているような、と藪笠が思った。

瞬間。

「向こうソコソしてゐるのよ」

「…？」

背後の声に數笠の体が大きくビクッと震えた。

「か、かかか鍵谷ッ！？」

「全く、何してるかと思えばあんたは」

腰に手をつき呆れたよつて息を吐く鍵谷。

「いや、違つからな！俺は別に戾り」

「最低よね。いくら女の子にモテないからって覗き見なんて」

「ツ！…違つ！俺はただお前ら二人トークに入れないから」

「はいはい。言い訳がうまいまい」

イラッ、と鍵谷の態度に額に青筋が浮く。  
そして、我慢を通り越した數笠は鍵谷に、

「もうこつこつお前じりんな所でなにしてんだよー。」「ツー？」

その瞬間。

鍵谷のわざわざまでの余裕な表情が消える。  
しかし、そんな事に気づかない數笠は、

「お前こそ誰が田舎で死角のこじりきたんじゃねえのか？」「ツ！なな何い」「だったら説明してもらおうか。手にカップも持たずに来たわけを？」

「え…………あ…………」

藪笠の言葉に口を閉じる鍵谷。

勝った、と藪笠は鍵谷に背を向け密かにガツッポーズをした。  
そして、まあ冗談だよ、と伝えようとした藪笠が鍵谷に振り返った時。

そこには、

「…………」

赤く染まつた顔をふせる鍵谷の姿があった。

何か、俺…………言い過ぎた?と顔をふせる鍵谷に動搖する藪笠。

すると、

「…………なるの…」

「え？」

微かに鍵谷の小さな声が聞こえてきた。  
しかし、何を言っているかわからない。  
藪笠は首を傾げ、

「「あん、聞こえなかつた。もう一回言つてくれねえか?」

両手を合わせ頼む藪笠。

それに対し、さらに顔を真っ赤に染めた鍵谷は……。

「…………れば…………なるの…」

「…………ん…………?」

「…………れば…………びとになるの……」

「? ?

「ツーーー」

未だ言つている言葉にきづかない藪笠に、ついに鍵谷は動いた。  
ズンズンと藪笠に迫り寄り、

「つあ、なー?」

体が当たりそうになる所まで迫った鍵谷は、

「あんたは」

やけくそのよつに唇を動かした。

「あんたは誰でも頼まれば恋人になるの！」

沈黙がその場に流れた。

顔を真っ赤に染めながら藪笠を見つめる鍵谷。  
あまりの事に目を見開き、茫然と鍵谷をみる藪笠。

物語は続いていく。

## ルート?3 (前書き)

いまこれがです……

## デート?3

### 第八話 デート?3

「か、鍵谷……」

固まる藪笠。

そして、顔面真っ赤の鍵谷。

二人の視線と吐息が交差する。

その時。

「お二人さん」

「……？」

その声に二人は体を引き離し、ぱつ、とともに距離をとった。  
そして、声のした方向に顔を向けるとそこには、

「は、浜崎……」

「花！？」

口元をゆがめ、にやりと笑う浜崎と口に手を当てる島秋が立っていた。

「まさか真木がそんなことを言つなんですね……」「真木ちゃん……」

二人の視線が鍵谷に集中する。鍵谷は手を前に出し、

「え？ あ、違う…違うから…！」

八・一・三・八・二・三 | 一・六・五・九 ハ

と、言い張るが、

「本当に？」「ツー？」

浜崎は藪笠を近くに寄せ、もう一度尋ねる。

「…………うう」「うう？」

直後。

「うわああああああああああああん！！」

鍵谷は泣きながら叫び、逃げた。

「あ、やつ過ぎたかな。それじゃ、數笠。花の事、頼んだわよ。

そして、浜崎もうつと鍵谷のあとを追い掛け出でいった。

静寂がその場に漂つ。

「島秋……」

「何？」

「……出るか

「…………う」と

はあ、と重い息を吐く數笠。

そして、島秋と一緒にレジに向かい、お勘定を払う。

だけのはずだつたのだが、

公園

數笠は音量全開で叫んだ。

あの後、レジに行くと何故かそこにマッチョの店長が立っており、

『あの食い逃げた一人分の金、払っていただく』

その結果。藪笠の財布はもぬけの殻になつた。

「はあ……」

思い出しただけで嫌になる。

藪笠は肩をガクッと落としひんちに腰を下ろした。

「ま、まあ。落ち込まないで、藪笠君」

藪笠にそつ言葉をかける島秋だつたが一向に戻る気配はない。

「よこしょ、つと」

島秋は藪笠の隣に座つた。

そして、

「それに後、一回行くと」行つたら終わりだから

「一回?まだ行くと?あるのか?」

「うんー。」

……どこ行くんだ?と、まさかまた食べる所ではと眉を引きつりながら藪笠。

すると、そんな藪笠に島秋は、

「それはねー」

ベンチから立ち上がり、手を後ろの腰にやり、

「映画館」

「ほんと島秋は笑つた。



## パート4?（前書き）

やつとパート編終了です。  
文が短くて、すいません。

## デート4?

### 第九話 デート4?

「映画館…」

藪笠はその言葉に田を丸くした。そして、もう一度頭で聞き間違いだとし、

「映画館？」

と、尋ねた。

しかし、

「うん。映画館」

島秋の言葉は変わらなかつた。

『劇場版 食料理人サラ』

數笠の目の前に立て掛けられている看板に書かれている文字だ。

そして、対象年齢11歳。プラス一時間半上映。

「…………」

茫然と立ち尽くす數笠。

すると、そこへ、

「何してるの、數笠君？」

手に飲み物を持った島秋が歩いてきた。  
しかも、片腕にはビニール袋が通され、中には映画館当たり前のグッズ商品が入っている。

ゆうくじと島秋に振り返り、面白いのか…これ?と尋ねてみる數笠。

「うん」

言葉とともに蔓延の笑みを浮かべられた。  
そして、

「行ひつー。」

數笠は島秋に連れられるがままに上映室へと足を進めて行くのだった。

上映内に入ると、中には沢山の親子たちが席に座っていた。  
そして、何故か後部座席だけが空いており、

「よこしょ、つと」

數笠と島秋はそのまま後部座席へと座った。

「…………なんで後ろがこんなにかいなきなんだよ」

「?」

數笠は小さくため息を吐き、

上映が始まった。

どうやら、主人公のサラという少女が挫折しながらも料理の腕を磨きあげる。といったストーリーらしい。

藪笠は肘をつきながら欠伸をした。  
上映されてから今ちょうど一時間。

観た限り話は後半へと進んでおり、ある程度観た藪笠の感想からしては、まあまあだというものだった。

（何かこの頃のアニメって大人向けが多いよな……）

最初は小学生が見るようなアニメなんて、と思っていたが観ていくと小学生には無理だううという言語がちらほらと聞こえ、後半からはちょっと過激なラブシーンといった物が出てきた。

( もつもつこいつ系でも出さないと視聴率とれないのか？ )

呆れながら片手を頬につける藪笠。

そして、早く終わらないかと。ちらりと島秋に視線を向けようとし  
た。

その時、

「 ツー？」

ポテツと島秋の頭が藪笠の肩にもたれ掛かった。

「 お、おいー島秋ー！」

顔を真っ赤にさせ動搖を隠せない藪笠。

しかし、一方の島秋からは、

「 すう」

寝息？

ガツクリと一人落ち込む藪笠。

上映が終わるまで後。

島秋の髪からシャンプーの甘い匂いが漂い、それに付け加え、枕代わりとしては気持ちが良かつたのか藪笠の肩に頬を擦り付ける。

自身の体が暑くなるのがわかる。

顔を真っ赤にした藪笠はそのまま固まるしか出来なかつた。

夕陽が空をオレンジ色に染まる中、

「うーん 」

河原を歩く島秋は体を伸ばしていた。  
そして後ろでは、げんなりとした藪笠がいた。

「面白かったね、藪笠君」

「…………ああ」

「ひひは疲れました。

肩をすくめ島秋の後ろ姿を見てそう思つ藪笠。

あの後、やつと上映が終わり緊張感から解放されたは良かつたが、室内の明かりがつくと何故か前部座席にいた親御さまがたの視線の的になり、急いで寝ぼけた島秋を連れて映画館から離れたのだ。

そういうわけあって色々と疲れた一日だった。

やつと帰れるな……と息を吐く藪笠。

すると、その時。

「あー…そうだ」

何かを思い出したのか島秋はぐるりと藪笠に振り返った。  
そして、

「藪笠君」

「ん?」

「今日。ありがとうね、藪笠君」

……へ？

いきなりのことに頭の回転が追いつかない。

「…………何が？」

「もう…………何がって、『データ』。付き合つてくれたことだよ」

ああ……その事か、と納得する數笠。

そして、數笠の返答は……、

「…………データっていうか道連れだる。ただの『

根に持つてる！？』と叫ぶ島秋。

まあ、当たり前だ。

何せ食べ物に当てにデータに誘われ、さらに胃の限界ですとこつまで食べさせられたのだ。

「」めぐなせこ、ヒザを出しひپつと頭を下げる島秋。

反省してないだろ？とシッ ハリかける藪笠。

が、その時。

「（……でも…………私も、初めてだったから、ちょっとはドキドキしてたんだよ？）」

「え？」

今、何て……。

島秋にせつ尋ねようと口を開く藪笠。  
しかし、口を開くその前に、

「じ、じゃ、また学校でね！」

ダダダダと一瞬にして走り去っていった。

藪笠は一人ただ立ち尽くすしか出来なかつた。



## 体育？1

第十話……体育？1

五円三田

二時間目

運動場にて、

「ぐはつ！？」

突如、一人の男子が地面に崩れ去るよつにして倒れた。  
そして、

「ちょツ！？」

「ひつちぐるギャツ！？」

「藪笠テメぶはツ！？」

死者が増えていく。

「はあ、はあ、はあ、はあツ」

額についた汗を腕で拭い藪笠は思つた。

「これ、球技じゃなくて死刑だよな…。」

すると、その直後。

「逃げないでよ、藪笠」

一人の女子の声が聞こえてくる。  
恐る恐る顔を向けるとそこには長髪の黒髪をサラッと振り、片手に  
やや固いゴム製のボールを持つ。

「私、普通に藪笠とドッヂボール殺りたいんだよ?」

鍵谷真木の姿があつた。

数分前

「どうだった、花。デートは楽しめた？」

うん！

現在、教室では島秋と浜崎が昨日のデート話をしている。  
そして、その最中では、

數笠一·一·

廊下で一部の島秋ファンに追われる藪笠の姿があつた。

学校に行くと同時に待ち伏せ、そして、ホームルーム前のチャイムが鳴るまでの長距離マラソン。

チャイムが鳴り、やつと解放されたと藪笠は息を吐く。  
そして、一〇も通り授業を受けてから教室に足を踏み入

そして、いつも通り授業を受けようと教室に足を踏み入れた。

直後。

〔 〕

後悔という字が頭に浮かんだ。

「映画館行ったの？」

「うん」

楽しそうに喋り合つ島秋と浜崎。

そして、その背後で、

バキッ……とプラスチックのペンをへし折る。

鍵谷真木。

この異常なまでの居心地の悪さに青ざめる藪笠。すると、そんな藪笠に一人の男子が近づき、

「（おい、藪笠）」

「（な、なんだよ）」

「（お前、鍵谷さんに何したんだよ）」

「（なんもして）」

「（嘘つけ！？お前しかいないだろ！鍵谷さん朝からずっとあんなんでお前が入ってきた直後に元気なアツアツしてんだよーーー）」

「知るかボケ！ーーー」

どこつもこいつも……と歯をしつつする藪笠。

しかし、その時。

ガタッと音をたて鍵谷は椅子から立ち上がった。

『…………』

沈黙が室内に漂う。

だが、そんなことはお構い無しなのか、鍵谷は一步一歩足を動かし、

「「フシーー？」」

藪笠の田の前に立つた。

視線と視線が交差する。

そして、鍵谷は藪笠の顔を見て、

「『」と笑い一言。

「昨日は随分と楽しかったそうね？」

あの………目が据わってないですか、鍵谷さん。

普段なら機嫌が悪くてもここまでにはならない。しかも何やら異様なオーラまで発している。

後ずさりそうになる藪笠。

すると、ふと藪笠は気づく。

あれ、そりこえれば他のやつらは？

モーと視線を鍵谷の後ろに向けると、

『…………』

皆が教室の隅っこに避難していた。

。。

逃げ場無じとせりつことなんだろつ、と數笠は染々思った。

「數笠」

「はい」

鍵谷は未だ二口と笑いながら數笠の横を通りすぎ、

「次の授業、よひしへね」

不思な言葉を残し、教室を出ていった。

「………… もう？」

この時、藪笠は知らなかつた。

まさか、あんなことになるとは…………。



体育？2

ドガツ！！

バガツ！！

と、「ゴムボールが地面をえぐる。

「はあ、はあ、クツソ…………」

そして、一方で、

「敷笠は地面に膝をつき、何とか凶器を奪い取ることができた。ゴムボール

「えー、解説の花さん」

「はいはい！なんですか、浜崎さん？」

「今の状況はいかがだと思いますか？」

「そうですねー、ぶつちやけ敷笠君の体力しだいですね」

実況解説をしてい、

「つて何してんだ「ラアアアアー！！」

「え？」

目を丸くさせる浜崎と島秋。

「え？ つじやねえ！ ！頼むからあのバカ止めろーーー。」

「無理」

「無理だよ」

「…………お前らな…………」

わなわなと拳を震わせる數笠。

コイツらの脳天に鉄拳をくらわしてやるか、と今まで想つたが。

しかし、今はそれどころではない。

「…………鍵谷」

「何よ」

むつ、と睨みつける鍵谷。

そんな鍵谷に數笠は、

「ここの試合、何か賭けしないか？」

賭けを要求した。

理由は簡単だ。

早く終わらせて機嫌を取らす。

「俺が勝つたら今日から1ヶ月、ちよつかいかけてくるなよ」

のつてこいよ、と鍵谷を見る藪笠。

一方、藪笠の言葉に顔色を曇らせる鍵谷は、

「…………じゃあ」

顔を伏せ、

「じゃあ、私が勝つたら今度の休み、付き合つてよ」

直後。

周りから殺気が吹き荒れた。

「…………」

「藪笠、早く」

いや、周りから殺気が、と後ずさりやうになる藪笠。

しかし、そんなこと気にしていても仕方がない。

「わかつたよ

藪笠はゴムボールを固くに掴み、

鍵谷目掛けてゴムボールが発射された。

しかし

ガシッ、と鍵谷はコムボールを体で包み込むようにギヤッチし、

瞬時

「も、ら、二、た、あ、あ、あ、！、！」

費笠に向かって一矢ホーリーが発射された

反応が遅い。

とった！！と思つた。

直後。

「えーー？」

藪笠はニヤッと笑うと、片手で「△」マークのボールを掴みとり、片足を軸に体を回転させ。刹那に、

「わわわわーーっ！」

藪笠からのボールは鍵谷の顔面に直撃した。

照準がずれた。

まさか、肩を狙つつもりが顔面にあたるとは……。

直撃冷や汗をかく藪笠。

そして、一方で

「うひやあああ……」

目を回し、そのままダウンした鍵谷。

「…………あー」

藪笠はゅつくつと後ろに振り返り、

「これって……俺の勝ち?」

その数秒後。  
六十発のゴムボールが藪笠に降り注がれた。

## せいちない（前書き）

挿絵もいれてみました。  
よかつたら感想おねがいします。

1924694 — 1659 <

現在、十時三十分。

鍵谷は今、腕時計に視線を向けながら、

「こない

青筋をたてていた。

今日のために色々おしゃれをしたり、頑張りまくった鍵谷なのだが。

前回の体育での際、賭けで普通なら負けていた鍵谷だったのだが、皆から話により（特に女子からの）何故か鍵谷の勝ちになっていた。

「…………」

考えてみれば歎 笈には理不充分な想 こをさせてしまったのだらう。

（で、でもーーのチャンスを逃すわけにはいかないかなし……）

「…………」

よし！！つと握り拳を作り、

（頑張れ、私！！）

一人ただただ待つのだつた。

現在、十一時三十分。

「……アイツは

藪笠はわなわなと震えた拳を手にし。  
そして、

「アイツはいつまで待たせるんだあーーーー。」

怒号がその場一体に響き渡った。

數笠は今、待ち合わせの広場に立っている。  
約束の場所は間違っている。

やつ、數笠は……。

「はあ、はあ、はあ、はあ……

荒い息を吐く數笠。

待ち合わせからもう一時間は過ぎてこる。  
…考えたくはなかつたが、

「まさか、アイツ……

數笠は思つ。

「隣の広場と間違ってるわけないよな……」

藪笠は携帯を取り出し、電話帳から一人の名前を探す。

そして、田舎での名前。

『島秋』という名前に電話をかけた。



## 服屋と悲しい瞳

「島秋に感謝しろよ」

「…………」

藪笠と鍵谷は今、待ち合わせの公園から離れた商店街を歩いていた。二人がこうして会えた理由は藪笠が電話した島秋に鍵谷の居場所を教えてもらつたからだ。

「はあ。あの時島秋に電話番号聞いといてよかつたな」

「…………うう」

藪笠は携帯電話を片手に息を吐いた。

「それで、どこ行くんだ?」

「…………」

「おい

「…………パ……ト」

「は?」

言いがかりをうな表情で鍵谷は顔を赤くし、

「デパートーー!」

そして、現在。

「…………」

頬をつきながら、藪笠は『パート』の休憩所に座っていた。

一方、鍵谷はとこゝと、

「うーん」

休憩所の向かいにある服屋で服を見ていた。

退屈になつた藪笠は辺りを見渡す。  
どこも、皆一緒に男女の姿が見える。しかし、それにしては数が多すぎだと思った。  
すると、その時。

「藪笠」

店から出てきた鍵谷が立つていた。そして、苦笑いをしながら手を  
合わせ、

「…………」

「コスプレー?」

「う、うん」

まさか、こんなことになるとは思わなかつた。

藪笠と鍵谷は今、服屋の奥の更衣ルームに来ている。どうやら鍵谷の目的はここでしか入らないオリジナルの服だつたらしく、それを手に入れるには店のデザイン中の服を着て店長に見せなくてはいけないといったものだつた。

（「イツ…一人だと恥ずいからつて、俺をはめやがつたな）

じー、つと鍵谷に睨む藪笠。

そして、気まずいのか藪笠に振り返らない鍵谷。

だが、その状態もいつまでも続くことはなく、二人は店の人指定された個室の更衣室に入る。

「つば！？」

直後。鍵谷が盛大にむせた。

何にといふと、それは視線の先にある白と黒のチラチラとした。

メイド服。

「ねえ、藪笠！…ちょっと助けて…！」

鍵谷は直ぐ様、更衣室から出て藪笠のいる更衣室に向かい。そして、更衣室のカーテンを盛大に開けた。

「え？」

だが、そこにいたのは、

前髪をふわりと揺らせ、黒い羽織を来た。

悲しい瞳をした一人の男の姿だけだった。

## やつとの笑顔（前書き）

やつと書けました。  
後、やつたつこの話のイラストを「ロページ」に載してみたいと思います。

その瞳はとても冷たく、孤独のよつな。

鍵谷は田の前に立つ、籠笠を見てそう感じた。

「……」

沈黙が漂う。

籠笠は小さく息を吐き、羽織を揺らしながら鍵谷の横を通りすぎていく。

そして、店員に連れられ、奥の部屋へと入っていった。

ペタッと、力が抜けたように座り込む鍵谷。

(……籠笠だよね)

別人だった。

そして、今まで知っていた籠笠が嘘に思えた。

そうしてみると、

「何してんだ、お前」

「え」

店の女性店員と見覚えのない黒の服を着た箇笠が戻ってきた。衣装を着たお礼に、店長に貰つてきたのだろう。

「これで良かつたんだろ?」

「あ、うん」

鍵谷はわざわざの彼と違つて箇笠にきよとんとしている。

(箇笠……だよね)

一人、頭を悩ませ悩む鍵谷。すると、その時、

「鍵谷」

ビクッと肩を震わせる鍵谷。

振り返つてみると、そこにはさつまとうが代わり。

青筋をたてながら口元を緩ます箇笠が、

「まさか、お前は着ないとかはないよな？」

8

鍵谷は思い出す。

語着室はかけられていた物を

「…………あ、あははは…………」

ダメ?

その数秒後。

一人の少女の悲鳴が店内に響き渡つた。

そして、時間はたち。

「うう

鍵谷は今、籠とともに待ち合わせ場所だった公園に来ていた。  
鍵谷の手には大きな紙袋があり、その中にはオリジナルの服が入っている。

「さつて、これで終わりか?」

「う、うん」

その後。

鍵谷なりに頑張ろうとした、つもりだったのだが、服屋の一件や勇  
気のなさや「でただここに戻つてくる」としか出来なかつた。

(花のよひこ……)

鍵谷は友達の島秋のことを考える。

無邪気で、可愛くて、そして思つたまま行動する。

そんな彼女が羨ましかつた。

「んじや、また明日な

「……」

籠笠はそう言って鍵谷から離れようとする。

鍵谷は何も言えない。

せっかくの今日もいつもあっさつと終わってしまう。

嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ。

そして、鍵谷は離れようとする籠笠を握る。

「待つ」

て、と唇を動かそうとしたその時。

「…………

狐の嫁入り。

そのワードが籠笠の頭の中に浮かんだ。  
扇を落とした籠笠はゆっくりと手を握つて来た鍵谷に振り返つて  
みると、そこには、

「…………

あまつのことじに田を見開き、きよとんとする鍵谷の姿があり。  
たまは扇を落とした状態で囁ねる。

「…………

鍵谷」

籠笠は扇を落とした状態で囁ねる。

「家、来るか?」

何でこんな事になつたんだろう。  
鍵谷は自身の今いる状況を確かめる。

最初に、一階建ての団地のとある一室。  
その一室は畳七畳の一人部屋で生活には欠かせない、そんな家具やらタンスやらしか置いていない。

次に、服の脱ぎ、代わりに今日買ったオリジナルの服を着た自分。  
上の服には花柄の絵柄が胸元からしたまで綺麗に描かれ、下のスカートは少し短いめの薄藍色をしており、腕にはピンクの花飾りのついたリボンが巻かれている。

そして、最後に、

「タオルならそこにあるからな」

服を脱ぎ捨てた、上半身裸の籠笠が…。

(何でこんな事になつてゐるのああああー…?)

頭を抱え、一人もだえる鍵谷。

「…お、おい、大丈夫か?」

「はッ!…ただだ、大丈夫。大丈夫だから…!」

慌てて、籠笠にそう言いつつ距離を取る鍵谷。  
しかし、籠笠の視線は全く離れる事はなく、

「な、何?」

おずおずと尋ねる鍵谷。

一方で、いや…、と籠笠は視線を窓の外に向ける。

そして、小さな声で、

「(似合つてんじゃねえの….)」

「え?」

「あ、いや、なな何も言つてねえよ…!」

「で、でも今…」

「い、言つてねえ…!」

顔を赤くし、抗議する藪笠。

しかし、鍵谷はさつきの言葉を危機逃さなかつた。

『似合つてんじやねえの……』

「藪笠」

「な、なんだ」

未だ顔を赤くさせながら振り返る藪笠。

そんな藪笠に鍵谷は言ひ。

「あつがとう」

「うつむけの後、直ぐに雨は止み、鍵谷は帰つていった。

そして、この直後。

籠の地獄の明日が決定した。

凶おと遇に語るひねりへ（前書き）

感想お願いしますーー！

凶まと並んで詰められて?

「ハー」

凶む。

鍵谷真木は今、頭を抑え唸つていた。

今、鍵谷は教室の隅っこの席で座つている。  
そして、わざわざある一枚の紙を睨んでいた。

それはあくまでも普通の生徒なら貰はずの、

「普通はここの貰わないでしょ」

そこで、浜崎のキシコお嬢。

「む、もつ貰うよー」

「いや、普通に学園生活を送つたら貰わないわよ」

それも、と浜崎は続け、

「赤点注意の警告書なんて」

「う、と氣まずい表情になる鍵谷。

普段から学校の中でも有名な鍵谷だが、ただ一つ欠点といえる物があつた。

そり、それは『勉強』。

男性教師たちにとつてもそんな鍵谷を助けてやりたいと思っていた。だが、女性教師たちからのその冷酷な視線による監視により動くことができず、こじりう形で鍵谷に今の自分の状況を理解してもらおう、とした。

そして、今にいたるわけなのだが。

「玲奈、何とかならない?」

「無理」

「ちょいと。ちょいとだけ教えて」

「その言葉は聞きあわた」

全拒否を貫く、浜崎。

肩を落とし、大きな溜め息を吐く鍵谷は涙目な目線でチラリと浜崎の顔を除いた。

すると、さつきから会話をしていた浜崎は全くこりを見ていかつた。

じー、と浜崎は向こうの席を見ている。

何見てるの、と視線を向こうに向けるとそこには、

「だ……大丈夫、藪笠君」  
「む……無理……」

今にも倒れそうな藪笠と、手にジュースを持った島秋の姿があった。

(……いいな……花は)

島秋花は浜崎までとは言わなくとも、成績は優秀だった。  
そう、見た目からは全く想像できないくらいに。

浜崎と同じように茫然とその光景を眺める鍵谷。

すると、その時、

「ねえ、真木」  
「え? ……な、何?」

藪笠たちを見ていたことを隠そつとして苦笑いをする鍵谷。  
そして、そんな彼女に浜崎は口元を緩ませ、

「明日休み、勉強教えてあげるからアンタの家に行つてもいい?」

…………。

何だらう、物凄く嫌な予感がする。

彼女からの言葉に鍵谷は息を飲み込む。

もし、『こや』と答えたらどんな目に会わされるか……。

「い、いこよ……」

しぶしぶ、眉を潜めながら浜崎の提案を了解する鍵谷。

そして、その返事をもうひとつ浜崎は一コツと笑つたのだった。

「おはよー、真木ちゃんー。」

「…………」

「ふふ」

何だらひ、何で花まで一緒にいるのだらひ。

玄関の前で額に手をあてる鍵谷。

そして、浜崎にまさかと思ひながら尋ねる。

「ねえ、玲奈

「何?」

「まさかと思ひナビ、アイシも呼んでたりしないよね?」

「アイシ?誰のこと?」

「…………」

まあいいじゃない、と笑いながらかつてこの家に上がる浜崎。  
鍵谷はそんな浜崎を睨みながら、思った。

( 信用できないいいいいーーーーー )



出会いは突然と（前書き）

感想をお願いします。

出会いは突然と

「そりいえば、ねえ、真木？」

「……何？」

「ん？ 何怒ってるの？」

「……別に」

「れ、玲奈ちゃん。多分、さつきから玲奈ちゃんが勉強教えてあげないからだよ」

「ん？ そりなの？」

「ふん……（カキカキ）」

「真木……」

「そり、全部間違ってるわよ」

「ふにゃ ああああああああああああーーー」

はあ～、と息を吐く籠笠。

昼一時。

「浜崎のヤロー……」

街中から少し離れた辺り一面の畠沿い。  
そんな町外れな道を籠笠は一人歩いていた。

「大体、何で俺だけがこんな目に

籠笠はぐちぐちと喋りながら片手に握る一枚のメモ用紙を見ている。

「…………」

そこに書かれているものはどこかの家を示す地図。

昨日、浜崎にここまで行くようと言われ現在向かっているのだ。

『断つたら分かってるわよね』

とこう脅しつきで……。

だが、別に部屋にいてもやることがなかつたからまあ暇潰しこにはなつた、と籠笠はちょうど家並みが見え、その角を曲がつた。

と、その時。

「わっ！？」

「ッ！？」

ドォン、と後ろに倒れる籠笠。

いつの、と手を地面につき前を見ると、そこには一人の女性が同じように腰をつき倒れていた。

ちゅうど、同じように反対方向から曲がりついてきた女性にぶつかったのだ。

「あ、すいません！？」だ、大丈夫ですか？」

籠笠は直ぐ様、女性に駆け寄り、手を差し伸べた。

「いえいえ、いらっしゃりそ下さいません」

そして、女性の手を掴み籠笠がそのまま女性を起しあわせた。

だが、

「白刃さん」

「…？」

その瞬間。籠笠の動きが止まった。

そして、ゆっくりと女性に視線を向ける。

茶髪のストレートな髪に痩せた細腕。

大きな胸はあまり見ないようにして、籠笠は慎重に尋ねる。

「な、なんでその名前」

「ん？」

「？」

女性は眉を潜めながら籠笠に顔を近づけていく。籠笠は焦つて後ろに下がるが、

「ねえ、君。もしかして白刃さんの息子？」

「…………ああ」

「せつか、いやーあまりに似てるから驚いちゃったよ。『めんね』

そう笑う女性に籠笠は田を点てした。

「あ、アンタ、一体」

「あー、そうか自己紹介がまだだつたわね」

女性は腰に手をつき、口元を緩ませる。

「私の名前は鍵谷 藍」

「…………」

「ん? どう?」

「鍵谷…………」

「?」

籠笠は頭に手をのせ、思った。

何かやせこじくなるような予感がある、と。



## 繋がりと秘密（前書き）

よかつたら感想、一言でもいいんでお願ひします。

「私は真木の母方のお姉さんなの」

今、鍵谷 藍に連れられ籐笠はある家の廊下を歩いていた。

数分前。

「……が私の家よ」

藍に連れられて来た籐笠。

そして、最初に目にに入ったのが大きな屋敷といった昔々の家だった。

さらには、見慣れた自転車が一代も付き添いで。

「…………」

「どうしたの？さあさあ、入って」

籐笠は藍に言われるがまま入る、と。

そこには、

「何で、アンタがいるの？」

「…………」

仁王立ちする鍵谷 真木。

大体、検討はついていた。

鍵谷の後ろには顔をちりよこすと出す島秋と浜崎。

溜め息が籠笠の口からこぼれた。

しかし、そんなことがあつたが何故か藍の、ちょっと用事があるから、といつ言葉により三人はおとなしく部屋へと戻つていった。

怒らせたら怖いのか?と考え込む籠笠。

「高校時代からのクラスメートだつたんだよ

「え?」

「だから、あなたたちの親のことよ」

聞いてた?と視線を向ける藍。

籠笠は「ククク」と頭を傾かせ、何故か冷や汗をかいた。

そして、じつやう田的の場所にたどり着くとこつたその時。

「…………ねえ、芥木くん」

藍は足を止めた。

その瞬間、今までの藍の空気が変わったことが直ぐにわかった。

藍は籠笠の田を見て、唇を動かし、

「田引れとせびひつてゐるの?」

冷たい空気がその場を支配した。

籠笠は、藍のその間に口元を緩ませ。

そして、答える。

「…………死んだよ。ちゅうど、俺が3歳だった時に」

「…………やつ」

藍は田を開じしそう恐くと直ぐへしゃまにあつたドアを開けた。

「…………やつ」

籐笠の田に入ったのは部屋一体に配置された本棚。

「…………には資料やアルバムがいっぱいあるの」

藍はそう言つと、一つの本棚から一冊の本を取り出し、ページの一枚を開き籐笠に見せた。

「君のお父さんよ」

「…………」

籐笠は渡された本に貼られた一枚の写真を見る。

そこには一人の自身に似た少年が写っている。

そして、その隣には見覚えのある黒髪の少女、

「…」Jの人気が鍵谷の「

「…………ええ」

鍵谷真木に似た少女をじっと見る籠笠。

最初、藍に自分の父親について教えてあげると言われ、ここまでもうた。

そして、籠笠と鍵谷には親からの繋がりがあることを知った。

しかし、籠笠には藍が本当にこの事を教えるために自分を連れてきたとは思えなかつた。

「藍さん。やるやういいんじゃねえのか?」

「え? 何を」

藍は籠笠に振り返りその続きを言おうとしたが、

そこに止。

籠笠芥木はいなかつた。

いや。

今まで見ていた籐笠芥木はいなかつた。

藍はそんな籐笠を見て一度目を閉じ、そして真剣なまるで子を心配する親のような眼を開き、

「芥木くん」

藍は、

「あなた、もしかして……」

言ひ。

「

」

静寂が漂つ。

そして、籠笠は藍に尋ねられた問いに対し、

「ああ」

それだけだった。  
そう答えるしかなかつた。

「…………

藍は籠笠の返答に、そつ、と田を開じた。

そして、籠笠に藍は唇を動かし言つた。

「それが、あなたの本当の顔なのね」

「無理……だつて藍わん鈍いし、年取つてゐくせに体つきなんて口こもん……！」  
「いや、年取つてゐつてアンタ…………あ…………」  
「それに籠笠だよ——藍さんの美貌に我慢できずには襲つてたらと思つ」と……！」

気になる。

鍵谷 真木は今、頭を悩ませていた。

あれからもう三十分。

「むう～～～～～！」

「……ちよつと、落ち着きなさこつて

「やうだよ、真木ちゃん」

浜崎と島秋はそう言つたが、

「いや、篠笠くんに限つて……あ

頭を抱え、嘆く鍵谷。

だが、そこで止まつ。

## 田の前で青ざめる島秋と浜崎。

そして、よくよく感じる殺氣。

ゆっくりと後ろに振り返る鍵谷。そして、そこにいたのは……。

「誰が鈍感の年取つたお姉さんつて？」「誰がバカアホ間抜けの俺だつて？」

ポキポキと指を鳴らす、籜笠と藍の姿が。

。 。

鍵谷はゆつくりと我が友に助けを頼もつと振り返る。

しかし、

そこに手を合わせ。

鍵谷の帰還を祈る一人の姿が。

その日、その屋敷から鍵谷の悲鳴が響き渡った。

## 繋がりと秘密（後書き）

出来たらイラストも自身のホームページに出したいです。

## 書きの始まり（前書き）

一応、ユーザー指定を解除しました。多分、ログインしなくても感想は書けると思うので

よかつたら感想お願いします。

春の終わりに差し掛かる一日前。

「はあ、はあ、ほ、本部……応答を！本部！ほぐはッ！？」

『おい！どうした、おい！返事をしろ！』

「残念。もう出ねえよ」

『……』

「レジスターと察が動いてると思ったらまさかスパイとはFBIかよ、全く」

『へ……貴様……』

「……よへ聞け、察ども」

「明日、俺達は一年の歳月を経て動き出す」

「う…………。」

「スコーピオンがなあ！――」

「はあ…………」

籠笠は息を吐く。

時間はちよつと休み。

皆が騒ぎ立つこの時間、籠笠は一人屋上でパンをくわえていた。

屋上から下を見下すと、そこには桜がパラパラと落ち、春の終わりを感じさせる。

籠笠は息を吐きつつ、

「春も終わりだなあ

「そうだねえ」

あれ?

籠笠はゆつくりと首を動かし、そこにいなかつたはずの人物に尋ねる。

「島秋、何してんだ?」

「ん? 篠笠こそ、何してるので?」

。

籠笠と島秋は今、屋上から三階に降りる階段を降りている。

「どうしたの、籠笠くん。今日は一段と変だよ？」

「おい、一段とつてなんだよ。お前から見て俺つてどう見えてんだ？」

籠笠は小さく息を吐きつつ、島秋にそう問いかがら、

ピタッ。

「ふえ！？」

「お前じゃ、田にクマできてるんだ。バイトでもしてんのか？」

突如、顔を触られた島秋は目を丸くし顔を赤く染めた。

だが、その顔にはそれ以外に驚きも含まれていた。

硬直する島秋。

だが、直後。

ギシッ、と。

音とともに籠笠の体は斜めに傾き、幸い階段を降りきる二段前にいたお陰で階段二段の高さから落ちた。

そして、突然のことに固まる島秋の側には、

「何、花に手出しちゃうのよ」

眉間にシワをよせた鍵谷真木の姿があり。  
そりには、

「　　「　籠笠ああああああああああああ　　」　　」

島秋ファンのバカジもまでもが、

。。

答えは直ぐに出た。

「　　「　ツ　　」

全力疾走。

「逃げたぞ！追え！！」

「逃がすな、あのナンパ野郎を逃がすな！！」

「二階の仲間に連絡しろ。挟み撃ちだ！」

ギヤアギヤアと騒ぎながら走り去っていく男達。

鍵谷は笑顔で手を振り、島秋は今だに硬直していた。

翌朝。

朝の5時。

「ふー……」

帽子を被った少女は一人、新聞の入った鞄を背負い走っていた。

道はちよづじ上り坂で、走るにしても体力は大幅に削られる。

両膝に手をつき、荒い息を吐く少女。

すると、顔の近くに茶の入ったペットボトルが出され、

「ほい」

「あ、ありがとう」

「ゴクッ、ゴクッ、と。

一気に渡された茶を飲み込む。

……あれ？

バツ！？と直ぐ様後ろに振り返る少女。  
そして、そこには、

「生き返りましたか、島秋さん？」

イタズラつぽく口元を緩ませる籠笠が立っていた。

「は、ははあ……」

「生活費のため、ね…」

篠笠と島秋は今、近くのベンチに座っていた。

新聞配達を何とか終えた島秋は篠笠が買つてきてくれたパンを頬張つている。

「お前、こつもじさんなことじしてるのか?」

「ん?」ゴクッとしたと、違つよ。ちよつと事情でお父さんが居ないか

「いや、居ないからって親父さんから生活費とかもらつてねえのかよ」

「へへん、違つた。私からこらなこつて言つてるの」

「は?」

「お父さんには私の事は気にせず仕事に励んではしこと想つてゐるが

「お父さんには私の事は気にせず仕事に励んではしこと想つてゐるが

「う

「いや、でも」

「私は私で何とかするし、それに今日お父さん帰つてくるから」

「…………」

藪笠はそんな笑う島秋を眉を潜め心配な表情で見る。すると、島秋はキヨトンとした顔で、

「藪笠くんつて」

「ん?」

眉を潜める藪笠に対し、

「そんな顔も出来たんだね」

…………カチン。

「人が心配してやつてるのにコイツわ

「いひや、いひやいいひやい！？」

ぐにい、と島秋を頬を引つ張る藪笠。

額には軽く青筋がたつていた。

そして、涙目の島秋は何とか藪笠から解放して貰うと、赤くなつた

頬を擦りつつ笑い出し。

藪笠も呆れたように息を吐きつつ、口元を緩ませた。

ちょいと、その時。

「おーい、花！」

「え？」

「ん？」

遠くからの声に振り返る島秋と藪笠。

視線の先には灰色の皮ジャンをきた中年の男が見え、さりげなくつづき地面にこけた。

。

竜笠は、何となくわかつた、と島秋に振り向く、

「あれって、親父さん？」

「う、うん。まあ……」

島秋は苦笑いするしかなかつた。

次回。

「懸念と绝望と……」

「花の父親の島秋正木です」

今、籠笠は島秋家族に連れられて島秋家に来ていた。

木製の古い一階建ての家。

お年寄りが住んでそうな八畳の畳に卓袱台。

そんな内装に小さく唸りつつ、お茶を飲む籠笠。

「それにしても君が籠笠くんか」

「え？」

「いや、花がよく君の名前を言つからどんな子かとお  
「ち、ちょっと…お父さん！？」

台所から和菓子を持つてきた島秋が慌てて駆け寄ってきた。

「なに言つてゐるの…止めてよ…」後、気にしないでね、籠笠くん

もう余計なこと言わないでよ…と父親に向かつて指差し再び台所に戻る島秋。

「島秋のやつ、楽しそうだな」

「？」

目を丸くする正木に対し籠笠は口元を緩ませ、

「学校でのアソツの顔はいつも見てるけど、今は普段以上にうれしそうな顔してるんですよ」

「…………… そうなんですか？」

「…………… ま、まあ、俺から見たらなんだけな」

顔をポリポリとかく籠笠。

正木はそんな籠笠に笑みを見せ、

「……………私は花に君みたいな友達がいてくれてよかったですと思つよ

「え？」

「あ、いや、気にしないでくれ」

正木は笑つて、後ろに立てられた写真たてを見た。

正木、花、そして花に似た女性の姿が写された写真。

「お邪魔しました」

玄関を出て、お礼を言つゝ籠笠。

「また、来てね」

花は口元を緩ませ籠笠を見送りにきた。  
すると、

「ちよっと、いいかな」

花の側にいた正木が呼び止めた。

「…………」

籠笠は正木と共に近くの通りを歩いていた。

「いや、すまないね籠笠くん」

「あ、いや別に気にしてないですから」

籠笠は笑いながら、空を見上げる。

沈黙がその場を冷たくする。  
だが、その

「四季装甲」

一言が冷たやせりに強めぬ。

「.....」

「.....やつぱつ、そつか」

正木は口元を閉じ、籠笠を見る。

「君が何故こんな所にいるのかは聞かな」と

「.....」

「.....だけど、君に知らせておひつね」

「お父さん」

花は家の向かいにある電柱の側で父、正木が帰つてくるのを待つていた。

「花、何しているんだ？」

「何つて、お父さんを待つていたんだよ

「ああ、そうか。悪かつたね」

正木は苦く笑いながら花の頭を撫でた。  
花も口元を緩ませ、頬を赤らめる。

「さあ、家に入ろうか

「うん」

そして、二人は家へと一步一歩と進めた。

その刹那。

キキイイイイイイイイイイイイ！…ヒ。

音の後…。

ドゴッと鈍く生々しい音が平穏な生活を絶望へと変えた。

絶望。

幼い頃にお母さんを亡くし、その悲しみを隠しながらお父さんと生きてきた。

お父さんだけが私のたった一人の繋がり。

とても、大切な……。

時間は午後九時。

今だ寒々しい冷えた夜の緊急病棟。

通路は暗く、唯一、光るのは手術中とかかれた照明がある集中治療室。

そして、集中治療室の扉から少し離れた所に複数の人影がある。

「花……」

鍵谷真木、浜崎玲奈、そして顔をふせ一言も口を開かない島秋花だ。

さうして、向かいには籠笠芥木が壁に背をつき島秋を見ていた。

知らせは直ぐに届いた。

事件は籠笠が島秋正木と別れてから数分後。

島秋正木は、自宅前で突如向かつってきた車に衝突した。  
咄嗟の判断で、娘である島秋花を突き飛ばし、彼女は軽い擦り傷で済んだ。

だが、その代償はとてつもなく大きかった。

運ばれてから一時間は経つ。

今だ手術中とかかれた照明は消えない。

皆が島秋正木の無事を願う。

そんな中、

「お取り込み中にはまない」

その声と共に、通路奥からコツコツと音をたて、誰かが歩いきた。

そちらに視線を向けると、そこには一人の中年男が立っている。男は胸ポケットから手帳らしき物を取り出し、

「警察だ」

警察手帳を目に見せながら、男は島秋の前で足を止めた。

「……島秋 花さんだね」

男は手帳を開き、今の彼女の状態など関係ないと言わんばかりに話しかけようとする。

「ち、ちょっとーまさか今の状態で事情聴取するつもりじゃないわよねー」

浜崎は島秋を守るように前に立ち男に抗議する。だが、男の顔にはこれといって変化はなく、平然とした表情で浜崎を睨み付け、

「……退いてくれないか？仕事の邪魔だ」

その言葉に苛立ちを覚えた浜崎。だが、

「ふざけないでよーー」

その反応よりも早く、鍵谷は男に詰め寄り怒りを露にした。

「いくら刑事だからって、人の気持ちを何だと思つてゐのー」

大切な人を亡くした苦しみ。

それが今、直ぐ田の前まで来ている。

その気持ちを知っているからこそ、こんな横暴な言葉が許せない。

鍵谷は男を睨み付け、さらに言葉を口にしようとした。

「君は確か、鍵谷真木、さんだつたね」

「！？」

だが、突如。

その言葉に口を閉ざしてしまった。

「そつちは浜崎玲奈」

「！？」

男は浜崎を睨み、手帳を一枚めぐり、

「君みたいなお嬢様がこんな所にいるとは、私にはそういうのほつが  
疑問に思つよ」

「……」

浜崎は眉間を寄せながら、頬には密かに汗が流れ出していた。

やつを今までの立場が逆転した。

「悪いが君たち見たいな子供の相手をしてるつもつはない

男は息を吐き、今度こそ島秋に尋ねる。

「君が知っていることを教えてくれないか」

「…………」

「車の特徴、運転していた男の顔、何でもいい

「…………」

「父親の仇をとりたくないか?」

「…………」

静寂がその場に広がります。

島秋はいくら問い合わせられても一行に口を開かない。

目の前で父親が跳ねられ、さらには母親を亡くしてゐ。そして、今その父親の命すらどうなるかわからない。

少女にとつてこれ程の痛みはない。

これ以上の問いかけは少女の精神を苦しめる。

そんなことは誰もがわかつていた。

そして、だからこそ意識させてはならなかつた。

だが、

「君の母親、島秋 加織さんの死にも繫がる……と言つてもダメかな？」  
「！」

その瞬間、島秋の肩がビクッと大きく動いた。

## 母親の死

車

## 特徴

男.....犯人.....母親父親母親母親母親母親母親.....

定まらない声が島秋の口から発せられる。

ガタガタ、と体を震え出させ頭を押さえ出す島秋。

「は、花！！」

「落ち着いて！大丈夫だから、気をしつかり！」

鍵谷と浜崎が急いで島秋を抱き締め、落ち着かせようと動く。

「駄目だな、と男は息を吐いた。

そして、島秋に一言も無くただ振り返り歩き出す。

無駄なことはしない。

まるでやつ言つていいかのよつた後ろ姿。

だが、直後。

ドオン！…と。

その場を一瞬に沈めるほどの音が放たれた。

「な、何！？」

鍵谷たちはその音に直ぐ様、振り返る。

そして、その視線の先には、

「……な、何のつもりだ……」

「……」

男の目の前に立ち、右拳を壁に叩きつけ、行く手を阻む。

籠笠芥木の姿があった。

「……別にアンタが間違ったことをしてこる訳じゃない」

籠笠は拳を壁から放し、一步。

「……アンタが捕まえようとしているスニークオンを捕まえたければ  
使えばいい」

ポケットから古びた手帳を取り出し、籠笠は男に向かって無造作に  
投げつけ、さらに一步。

「だけどな……」

「…………」

「これ以上、俺の周りで俺に関わるやつを苦しめるな！」

籠笠は男の胸ぐらを乱雑に掴み上げ、

「お前もスコーピオンと同様に消してやるよ」

直後。

その場にいた皆が一瞬の殺氣で凍りついた。  
それは今までいたこの場に突如現れた。

そう、いてはならない何かが現れた。

まるで、そういうしたものだつた。

「警察を、あまり舐めるなよ」

それが男の去り際の言葉だった。

あれから、数分が経つ。

「おー、島秋と浜崎は?」

皆の分の缶ジュースを買って戻ってきた藪笠は、そこに座っていた鍵谷に尋ね、手にあつた飲み物を渡した。

「お手洗いだつて」

そう答えた鍵谷はそれを受けとると、まだ飲む気になれないのか両手で持つたまま顔を伏せる。

藪笠は一息つき、後の飲み物を横に起きながら鍵谷の隣に座った。

「ねえ、藪笠……」

「……何だよ」

籠笠は天井を見上げながら、缶ジュースの蓋を開ける。

「…………大切な人が目の前からいなくなる、って…………どう思つ?」

「…………」

「…………私はお母さんを亡くしてるんだ。…………って藍さんから聞いてるんでしょ?」

「…………ああ」

やつぱり……と鍵谷は小さく笑い、

「私には藍さんもいるし、みんながいるから…………気持ちが折れるこ  
とはないと思つ……」

「…………鍵谷」

「だけど…………」

鍵谷は両手にもつ缶ジュースを見つめながら、慎重に言葉を考え、

「…………花にはお父さんしかいないんだよ。どれだけ、私たちの  
まえで笑顔を振る舞つても、花には…………」

…………そう言つて口を紡ぐ鍵谷。

籠笠は島秋の家に行つた時の島秋花の顔を思い出す。

いつも、笑顔を振る舞い。

一番に氣を使つてくれ。

こんな俺にも、氣を使つてくれてこる。

「…………だ

「え…………？」

「辛いに決まつてんだろ…………」

籠谷は田に手を載せ、やう言つたきり口を開けなくなつた。

鍵谷もそんな籠谷に合わすよつて喋らなくなつた。

そして、一、二分と時間が経つ中。

「あれ、花は？」

手洗いから帰ってきた浜崎の言葉に籠笠と鍵谷は顔を上げた。

「え、何言ってるの？玲奈と一緒にじゃ

「いや、花は先に行くって言って……」

浜崎の声がわずらう。

嫌な予感が三人の中に抱いた。

精神的に危機的状態にも関わらず、行方を眩ました島秋。

まさか、と籠笠は咳く。

もし、島秋があの時。  
車を運転していた男を見ていたら。

もし、そいつの顔に見覚えがあるとしたら。

もし、そいつの居場所を知っていたとしたら。

## その瞬間

箇笠は歯噛みし、

「クツソ！！」

直後、走り出そうと足に力を入れた。

「ちよつと待つて……？」

そんな箇笠の腕を浜崎は掴む。

「お願い。私は警察に電話するから、もし花を見ついたらちゃんと電話して」

— 二二二 —

玲奈！ね、私も

「ダメよ。真木は花の家に行こうて花を探してきて、居なかつたらそ  
の場付近を見て回つて！」

二二二

そう言われ、口を紡ぐ鍵谷。

しかし、心境は納得がいかないといった物だつた。

だが、浜崎も思いつきで言つてゐるわけではない。  
今、Jの中でも一番に冷静さを保つてゐるのは浜崎だ。

「藪笠……」

浜崎は鍵谷から藪笠に視線を向ける。

そして。

この時、藪笠は気づいた。

浜崎に捕まれている手が震えている。

どれだけ、冷静な表情をしていても不安で仕方がない。  
だが、その心を押し殺し。

藪笠に伝えようとしたている。

その気持ちが伝わってくる。

「浜崎」

「え？」

藪笠はもつと方の手で浜崎の手にそっと添える。

「心配するな。島秋は絶対に見つけてくる」

「藪笠……」

「鍵谷も、心配するな」

「…………」

籠笠は口元を緩ませ、浜崎の手をそっと離せさせ、

「じゃあ、行つて」

「待つて、籠笠」

突如、鍵谷が籠笠を呼び止めた。

背を向ける顔だけを鍵谷に向ける籠笠。

「…………ツ」

顔を伏せ、押し黙る鍵谷。

震える手をぎゅっと片手で掴み、祈るように胸に手を置き、

そして、

「…………花のこと、お願い」

「…………わかってるよ」

籠笠は小さく口元を緩ませると背を向けながら歩き出す。

そして、籠笠は最後に聞こえるか聞こえないか、といった声で、

「……ここで止まつゝも終わらじへる」

その言葉を残し籠笠は走り出す。

友を助けるために。

全てを終らすために。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8076i/>

---

季節高校生

2011年11月21日09時42分発行